

レースっていいよね
第25回 「初心忘れてたよ」の巻

ここ数ヶ月の間に色々と考えさせられることがあった。

このHPではお馴染、長谷川の兄イの家に遊びに行った時の事だ。
以前から兄イの勤める会社の、同僚の息子さんがレース好き(どうやら家族全員で好きらしいが)とのことで、何かレース関係の土産を頼まれていた。そこで、まあ何の事は無い、ステッカーやカレンダーをあげた訳である。

ステッカーやカレンダー、Tシャツ、帽子、その他もろもろ、さすがに年を越す毎に溜まっていく。「いつかまた使うこともあるだろう」とその数は箱詰めにして結構になる。これらは私としてみれば、それほど重要なアイテムではない。なぜなら、確かにステッカーは「使えるものは使える」し、「Tシャツ」も着れないことは無い。

ただ、使えるステッカーってのはどうも数が少ない。衣類に至っては、仕事以外で着るのは恥ずかしいデザインだ。もしこんなデザインの服でデートに出掛けようものなら、きっとその場で危機が訪れることになるだろう。

マニアックではあるし、喜ぶヒトもいるだろうけど、私の場合、仕事で使うものを普段の生活でまで見たくない。
つまり「仕事とプライベートはしっかり線を引きたい派」なのである。

さてその息子さん、兄イの話ではムチャクチャ喜んでいて、らしい。
あげた側としては喜んでもらえてヨカッタ、と思うわけだが、ふと自分の過去を思い出した。

かつて子供時代、クルマ関係の雑誌をむさぼり読んで、レースやラリーのビデオを繰り返し見ていた日々。白状すると、実は恥ずかしげも無くレース関係の服を普段着ていたこともある。
高校生の頃は授業サボってまでエフワングッズの店に入浸っていたし、初めて鈴鹿サーキットに行った時などは偶然にも、グループCマシンのテストをやって「マツダはウルサイ」なんて言いながら、ワクワクして最終コーナーから立上がって目前を爆音と共に走り去るマシンを見て満足していたものだった。
あの頃はレースの時、ピットに入れただけで幸せだった。普通はレースは観客席でしか見られない代物だからだ。

その自分が今この業界に身を置き、今までメディアでしか知り得ない人物、場所、マシンがとても身近な所にある。
そう言えば、先日鈴鹿の1000km耐久レースに、全くレースが初めての友人を連れていった。
GTとか知らないけど、さすがにピットで音や匂いを間近で感じると興奮したみたいで、相当喜んでくれた。

実は、その友人というのは某航空会社のスチュワーデスである。その彼女がこんなことを言っていた。
「私達って飛行機に乗るの普通のことだから、忙しいフライトの時ってウンザリすることもあるけど、お客様はいつも特別な思いを抱いて飛行機に乗っていらっしゃるのよねえ」

そう、そうなのだ。要は、私はこの業界に慣れてしまったのである。ステッカー1枚を貰って喜ぶ、昔の純な「ワクワク感」を忘れていたのだ。

この事実気付いた時、ちょっと反省した。レースを愛している者の筈が、一番忘れてはいけない「客の気持ち」を忘れていてどうするのだ、と。

多くのレースは関係者の一部が満足するために運営されていないか？

レースに参加するエントラントのことも考えなければならないけど、それを見てくれる「客」の存在をもっと認識しなければならない。余りにも当然過ぎることだった。

